

R・アロンの国際関係論の認識論的検討 ——その自然状態論を中心に——

An Epistemological Study on the International Relations of R. Aron

高橋 正樹*

目 次

はじめに
第1章 アロンと戦争の時代
1-1、戦争の世紀
1-2、戦争の学問
第2章 戦争の政治哲学
2-1、社会現象としての戦争状態
2-2、三つの政治哲学
第3章 自然状態としての国際関係
3-1、政治秩序の二元論
3-2、市民社会
3-3、自然状態としての国際関係
第4章 国際システム
4-1、外交戦略システム
4-2、脱国家社会と国際システム
むすび

はじめに

本稿の目的は、レイモン・アロン (Raymond Aron, 1905-1983) の国際関係論における概念構成を、認識論のレベルから検討することである。この考察をおこなう背景には、国際関係論の共通パラダイムの欠如・認識論・秩序論にかかわる3つの問題関心がある。

第1に、国際関係、あるいは世界政治経済に関する諸理論に共通のパラダイムがない学問的状况に対する疑問があった。すなわち、「世界という場における政治状況」をどう把握すべきなのか、という発問に対する理論構成に出発点を与える前提命題の相違は、何に由来するのかという著者自身の疑問が研究の背景にある。

これまでの国際関係論をめぐる論争のうち、「現実主義」対「理想主義」、「伝統主義」対「行動論」という対立のなかには、パラダイムの転換はなかった。前者の論争における共通の

*TAKAHASHI, Masaki [情報文化学科]

パラダイムとは、いわゆる「古典派（伝統派）」と呼ばれる、諸国家間の対立関係という国際関係認識であった。その意味で、現実主義と理想主義の論争は伝統的パラダイム内における不一致であった。¹さらに、50年代後半から60年代にかけての「科学革命」による伝統主義対行動論の論争においても、国際関係理解のためのパラダイムに相違はなかった。そこでの議論の中心は方法論であった。行動論の内容は保守主義的・現状維持的であり、行動論者は「科学」をまとった古典的マキャヴェリアンであった。²したがって、この論争で両者は相補的であり、数量的研究は伝統的な洞察と知識によって導かれたといつてよい。³

古典派のパラダイムが真に挑戦を受けるようになったのは、統合理論や従属理論によってである。さらに、ナイとコヘインの相互依存論や、ガルトウングの構造論、ウォーラスティンの世界システム論などが、古典派パラダイムの相対化を決定的なものにした。ナイとコヘインの目的は、経済と政治が密接に絡み合っている先進諸国における「経済的相互依存の政治」を分析することである。⁴そこでは、古典派とは違い「経済の政治的側面」が注目される。そして、国家中心・軍事中心・対立中心の古典派理論に対して、その理論的閉鎖性を明らかにした。

他方、従属論に強い影響を受けた構造論や世界システム論は、相互依存論と同様に経済社会的な側面に注目しているが、相互依存論とは異なり垂直的構造に注目する。構造論では世界構造を中心部と周辺部をそれぞれ内包する中心国と周辺国によって構成される封建システムとして認識される。また、世界システム論は「唯一の社会システムは世界システムだ」という前提から出発する。ウォーラスティンによれば、部族・共同体・国民国家などはどれもそれ自身では自己完結的な全体システムを形成していない。したがって、かれは古典派が最も強調する「主権国家だとか、もっと漠然とした概念である民族社会だとかを分析単位としよ」という着想を完全に捨てた」という。⁵ここにパラダイムの転換があることは明らかである。

以上のように、ウォーカーに従えば、今日の国際関係論には、古典的マキャヴェリアン、

1 Arend Lijphart, "The Structure of the Theoretical Revolution in International Relations," *International Studies Quarterly*, Vol.18, No. 1 (March 1974) 54.

2 Stanley Hoffman, *Contemporary Theory in International Relational Relations*, Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, Inc., 1960, p. 86.

3 R. J. Rummel, "Indicators of Cross-National and International Patterns", *The American Political Science Review*, Vol. LXIII, No. 1 (March 1968) 128.

4 Keohane and Nye, "International Interdependence and Integration", in Fred I. Greenstein and Nelson W. Polsky eds., *International Politics, Handbook of Political Science*, Vol. 8, Massachusetts, 1975, p. 394.

5 E. ウォーラスティン (川上稔訳)『世界システム論Ⅰ』岩波書店、1981年、9頁。

自由主義的機能主義、マルクス主義的構造主義の今日的構成（updated brand of Marxist Structuralism）にそれぞれ分類できる。⁶これらの理論系譜が鼎立状況になるというのが国際関係論をめぐる理論状況である。

第2の問題関心は、前述のパラダイムの相違は、認識論の問題として捉える必要があるということだ。三つの理論系譜はいずれも経験科学であるが、それらは異なる世界像を描いている。その理由は、理論以前の段階でのメタ理論的要因が理論構築に重要な役割をはたしているからである。さらに、その理論が対象とすべき「現実」は無限でありカオスであり、理論によって認識され選択される現実は全体のごく一部である。この価値と認識の問題は、社会科学が避けておることができない問題であり、国際関係論の分野でも当然議論されている。たとえば、マクレランドは、理論家の認識や選択は、その理論家がつ認識構造ないしはイメージと呼ばれる理論以前の要因に媒介されると指摘する。⁷「人間の創造物として、理論はその創造者のイデオロギーから生まれそれを反映する。すなわち、理論はその創造者が世界にあるもの、あるべきものとして見る際の仮説や信条観念によって制約を受けるのである。」⁸

第3の問題関心は、国際関係論においてこの認識論的相違が最も明確に現われるのは、国際秩序論や国際システム論の中にあるという点である。つまり、国際関係論における認識論の問題は、世界という場における政治状況をどのように概念構成するかという問題に密接に関わってくる。さらに、国際システムは国際秩序を理論化したものであり、理論家の国際関係に対するイメージを最も良く反映していると考えからである。

以上の視点から、本稿では、古典派に属するレイモン・アロンの国際関係論を検討するが、そこから、西洋の長い歴史と政治哲学を背景にした古典派の国際関係論のひとつの典型を知ることができるであろう。古典派理論の国家中心、安全保障中心の理論を乗り越えるためにも、その認識論的分析が不可欠であろう。さらに、とくにアロンの理論を検討する意味は、アロンが古典派理論家のなかでも、その学派的中心的関心である「戦争と平和」の問題を正面から捉えている点にある。アロンが、いかなる前提命題に基づき、世界という場における政治状況をどのように概念化したのかを明らかにすることは、共通のパラダイムのない今日、新たなパラダイム構築の貴重な視座を与えてくれるであろう。

6 P. B. J. Walker, "World Politics and Western Reason: Universalism, Hegemony", *Working Paper*, No. 19, WOMP (1982) p. 9.

7 マクレランド、C. A. (高橋先男訳)『国際体系と処理論』福村書店、1979年、21頁。

8 Keith L. Nelson and Spencer C. Olin, *Why War?*, Berkley: University of California Press, 1979, p. 4.

以下、第1章では、アロンの思想とアロンに強く影響を与えた時代状況との関係を明らかにする。第2章では、国際関係論に先立つアロンの基本的政治哲学を、そして第3章では、アロンの国際秩序論をそれぞれ検討する。

第1章 アロンと戦争の時代

本章では、アロンの国際関係論は戦争という例外状況に強く影響を受けたということを明らかにしたい。アロンは、20世紀前半のヨーロッパの激動の時代に、思想形成にとって重要な青壮年期を過ごした。このヨーロッパ激動の時代こそがかれの思想に決定的影響を与えたのである。

1-1、戦争の世紀

では、「私は生成過程にある歴史の目撃者であり、同時に書かれそして話された言葉を通しての政治における行為者でありたかった」⁹と自ら語るアロンは、20世紀前半のヨーロッパに一体何を見たのだろうか。アロンは1905年、ユダヤ系の法律家の息子としてパリに生まれた。その年、ロシアでは日露戦争下で「血の日曜日事件」に端を発した「1905年の革命」があった。それはロシア革命の始まりであったと同時に、ヨーロッパの動乱の始まりでもあった。そして、1914年、ヨーロッパで第一次世界大戦が勃発する。

アロンが20世紀の戦争に観たものは、破壊と殺りくという人類の進歩という幻想を打ち砕くのに十分な現実であった。アロンによれば、ヨーロッパ全土を覆ったこの戦争は、すでにナポレオン戦争がその一部を明らかにした「全体戦争」の様相を呈した。そこでは、人類の進歩の象徴とされた「民主主義」や「国民国家」は、市民を「国民」として、そして「兵士」として戦場へと駆り立てた。国民はナショナリズムに燃え、国家のために戦ったのである。つまり、18世紀の限定戦争では戦争は一部の職業軍人によって戦われたのに、20世紀の戦争は国民戦争であった。人民全体によって戦われ、その目的ももはや王家の利益や君主の運命ではなくなり、集団的社会としての国家の運命が賭けられるようになった。¹⁰「民主主義」と「国民戦

9 Raymond Aron (collected, translated and edited by Miriam Berheim Conant), *Politics and History*, New York: The Free Press, 1955, p. 18.

10 Raymond Aron, *The Century of Total War*, New York: Doubleday, 1955, p. 18.

争」は、戦争に「熱狂の組織化」とイデオロギー的プロパガンダを持ち込んだのである。¹¹

さらに、オーギュスト・コントが予言した産業社会の発展による平和への道も全く裏切られてしまった。¹²アロンによれば、産業社会それ自体は平和的でも好戦的でもない。それはいかなる目的でも、与えられたら強力な馬力を発揮する社会という中立的な性格を持つに過ぎないのである。産業社会の合理性と生産力の拡大は、そのまま戦争技術の合理性と破壊力の拡大に結び付いた。すなわち、「産業（工業）と戦争とは親族であり不可分である」ということが、第一次世界大戦によって明らかになったのである。¹³

この全体戦争の特徴は、ヒットラーの登場によって決定的となった。ヒットラーは大衆の不満をプロパガンダにより動員し、「民主主義的」に権力の座についた。そして、その全体主義的体制により大衆動員を行い、産業社会の合理性により、行政の集中化・合理化や戦争経済の計画化を押し進めた。その結果、全体主義的兵営国家を打ち立てたのである。さらに、ヒットラーは、合理化され尽くした行政を駆使することによって、幾百万ものユダヤ人をガス室に送り込んだ。¹⁴さらに、戦争のこの心理的側面と科学技術的側面は、第二次世界大戦後その歴史的連続の収れんとして、冷戦という形をとって現われた。すなわち、イデオロギー的対立と絶え間ない技術革新の結果である熱核兵器とミサイルの出現である。

アロンにとって、このような20世紀の破壊と殺りくは、人類の進歩という幻想を打ち砕くのに十分であった。少なくとも、人間行動の本質もしくは社会関係を規定する原則は、戦争という出来事に注目する限り、トゥキディデスの時代から全く変化がないのではないかと、時代の目撃者アロンは考えた。

1-2、戦争の学問

次に、この激動の時代におけるアロンの思想の変遷を辿ってみよう。高等師範学校時代までのアロンは、平和主義者であり戦争を嫌悪しそれに批判的であった。しかし、ヒットラー登場期のドイツ滞在のころから、次第に人間と戦争の憂鬱なまでに密接な関係にその冷静な眼を向けることになった。

11 Raymond Aron, *Paix et Guerre entre les Nations*, Paris: Calmann-Levy, 1962, pp. 304-305.

12 Raymond Aron, *La Société Industrielle et la Guerre*, Paris: Plon, 1959, pp. 5-17, *Century of Total War*, op. cit.

13 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 164

14 アロン（浜口晴彦訳）『発展の思想』ダイヤモンド社、1970年、71頁。

若きアロンは、その時代の若者と同様にアランの政治学に傾倒していた。とりわけアランの政治学や反戦的な言動には強い感銘を受けた、とアロンはいう。そして、その頃のアロンは、高等師範学校の多くの仲間と同様に、左翼的思想をもっており、自ら社会主義者を標ぼうしてさえいたのである。つまり、アロンは「善意の知識人」として、特権階級に対する人民の側に、伝統に対する進歩の側についていた。理性により社会を再構築することによる人類の進歩を確信していたのである。¹⁵

しかし、この若きアロンの進歩と平和への確信と希望は、人間の歴史への諦観へと変わっていった。アロンは1930年にドイツに渡った。それは、アロンがそれまでかれが受けていたフランスという狭い教育環境から自己を解放する必要を感じたからである。¹⁶ 1933年までのこのドイツ滞在中は、「ヒットラー革命」の時代であった。そこでアロンが目撃したものは、それまでかれがもっていた人間の理性に対する確信を粉々に打ち砕いてしまった。そして、人間についての悲劇的宿命を感じさせることになったのである。1938年にアロンは博士号を取得するが、その論文試問の際、審査員のひとりが、アロンがもつその「陰鬱さ」の理由を尋ねた。それに対して、アロンは「私はその審査員に、迫りくる危機が歴史の目撃者を陽気にさせないのだと答えた。その危機は今もわれわれの背後にあるし、私はかつて以上に悲劇のかなたの人間の宿命というある種の考えにとりつかれている」¹⁷と語っている。

高等師範学校時代にもっていたアランに対するアロンの賛意は、次第に憤激へと変わっていった。アロンはアランをモラリストと決めつけて非難する。アランは戦争は避けられるとか、力の計算はそれがたとえ戦争を予防するものであれ、結局は平和を危険にさらすことになると何度となく言った。しかし、「アランは、政治秩序や革命的状況に特徴的な極端な状況 (la situation extrême) のなかで、われわれに語るべき何かを持っていただろうか」、とアロンは問う。¹⁸アロンによれば、アランの政治学は、「平和の政治学」であり普遍性は持ちえなかった。というのも、アランは戦争そのものについての理論を展開しなかったからだという。すなわち、なぜ6000年以上もの間、いかなる文明もいかなる時代も戦争の恐怖から逃れられなかったのか、「なぜ、諸社会は戦争をおこない、なぜ人間はいつも戦いの準備をするのか」という問いを、アランは全くおこなわなかったのである。

15 Raymond Aron, "Alain et la Politique" in *Etudes Politiques*, Paris: Callimard, 1975, p.76.

16 Raymond Aron, (translated by B. Cooper), *History and the Dialectic of Violence*, New York: 1975, p. xi.

17 アロン『発展の思想』5頁。

18 Raymond Aron, "Alain et la Politique", p. 77.

アロンはまさにこの問いをおこなったのである。アロンは第二次世界大戦中、戦争を嫌悪するがゆえに、アロンを含めた大学知識人が、国際関係ことに戦争の研究を全く行わなかったことに深い自責の念をもった。その結果、「われわれが恐るべき戦争の真ただ中にあったとき、私は知識人あるいは教授連中が、歴史を通じて重大な役割を演じてきたこの社会問題の研究をなおざりにしてきたのは恥じ知らずなことだ」¹⁹と考えるに至ったのである。

このように、アロンは戦争という例外状況ではあるが数千年来人類と不可分であった問題を生涯の研究テーマとすることになった。

第2章 戦争の政治哲学

本章では、紛争の原因は人間の本性によりは、社会のなかに求めるべきだとするアロンの政治哲学を検討する。

2-1、社会的現象としての戦争状態

アロンの思想の底流にあるものは、人類は新石器時代以来、闘争と戦争から解放されたことはないという考えである。ではなぜ、人間は互いに敵対せざるを得ないのだろうか。ホッブスやニーバー、そしてモーゲンソーは、人間の本性の中にその原因を求めた。しかし、アロンはモンテスキューとともに、社会こそが紛争や敵対の本質的原因であるという立場をとる。

もちろん、アロンは紛争の生物学的・心理学的要因を無視するわけではない。生物学者が教えてくれるように、動物は攻撃性を持つ。そして、人間も動物と同様に、攻撃性を持ち互いに闘争的であろうとアロンは考える。すなわち、「動物であろうが人間であろうが、闘争性は厳密に生物学的原因を持つ」²⁰という。さらに、フラストレーションや緊張といった心理的要因によっても人間は攻撃的になることをアロンは認め、「この意味で、哲学者たちが、人間は本性的に互いに危険な存在であると考えerことは間違っていない」²¹という。

しかし、アロンにとって、人間における生物学的・心理学的紛争の原因はあくまで二次的

19 アロン（佐藤毅夫・中村五郎訳）『戦争を考える』政治広報センター、1978年、1頁。

20 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 340.

21 *Ibid.*, p. 343.

なものである。人間にとって個人間・集団間の紛争や対立は、人間の本性ではなく、社会の本性のなかに求めるべきだと主張する。つまり、モンテスキューがホッブスを批判していたように²³、「戦争状態は社会とともに始まる」というのがアロンの立場だ。²³アロンはゼロサム状況における対立の不可避性を次のように説明する。すなわち、「最も一般的に言うならば、ふたりの個人もしくはふたつの集団が同一の財を所有しようとしたり、相容れない目的を達成しようとする場合、かれらは紛争状態になる」。²⁴さらに、個人間や集団間の協力すらもその内部には競争の原理を含み、「競争は、その用語の最も広い意味において紛争の一部をなす」。²⁵アロンにとって、協力と競争（紛争）はコインの裏表ということになる。

2-2、三つの政治哲学

以上のアロンの社会化による紛争説明から、かれの国際関係論に関係する三つの政治哲学を導き出すことができるだろう。

第1は、政治の自律性の主張である。政治は本質的に紛争的であると考えアロンは、政治を経済・社会的要因から分離させその独自の法則性を認める。つまり、マキャヴェリとともに、人間の進歩という考えを拒否するような政治の権力闘争の側面に注目するのである。²⁶

政治の経済・社会的要因からの独立の法則を主張するアロンは、過去の政治社会学者たちが政治と他の経済・社会的要因との関係をどのように理解したかを分析する。それによれば、アロンはトクヴィルやモンテスキューに近く、コントやマルクスとは対立する。アロンによれば、この4人は三つの運動もしくは学派の基礎を築いた。第1を政治社会学のフランス学派と呼ぶ。これは、モンテスキューが創設者でありトクヴィルがそのひとりである。この学派は、「政治的秩序の自律性を強調し、そしてまた自由主義者である」²⁷といい、アロンはこの学派の継承者を自認する。モンテスキューはコントやマルクスとは異なり、近代社会に典型

23 アロンは、社会とともに戦争状態が始まることを強調するが、もちろんルソーのように人間の本性が善であるとか、自然状態は平和であるとかいっているのではない。すでにみたように悪なる人間性を認めるから、アロンにとってそもそもルソー的自然状態は存在しない。

24 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 343. 同様の定義として、たとえば、Raymond Aron, "Les Tensions et les Guerres du Vue de la Sociologie Historique", p. 384にある。

25 Raymond Aron, "Les Tensions et les Guerres du Vue de Sociologie Historique", p. 384.

26 Raymond Aron, "Machiavel et Marx" in *Etudes Politiques*, pp. 56-74. 周知のように、マキャヴェリ以前、政治は神の法や自然法によって説明されていたが、マキャヴェリは政治をそこから解放した。一般に「リアル・ポリティーク」と呼ばれるかれの政治哲学は、古典派国際関係論が共有する政治哲学である。

27 アロン（北川隆吉他訳）『社会学的思考の流れⅠ』法政大学出版局、1974年。335頁。

的な属性、すなわち産業的あるいは資本主義的属性に興味を示さなかった。そして、『法の精神』には、国家との関係における経済の優位も社会の優位もない。²⁸なぜなら、モンテスキューにとって社会の本質は政治体制であったからだ、とアロンは理解する。

第2の学派は、オーギュスト・コントのそれである。アロンはデュルケムや多くのフランスの社会学者をこの学派に分類する。「この学派は社会的なものを分析する際に、経済的なものにも政治的なものにも、ひかえめな役割しか演じさせない学派である」²⁹という。つまり、コントの社会学の分析の中心は、政治ではなく社会にある。そして、コントはより個別的には近代社会の産業そのものに注目し、その結果、科学による人間の進歩という哲学を発見したのである。コントにとって、「神学的」・「軍事的」社会は死滅し、「科学的」・「産業的」社会が誕生しつつあった。³⁰そして、その社会は平和的社会であるがゆえに、コントにとって賞賛すべきものであった。しかし、アロンはコントを楽観的すぎるとして批判する。なぜなら、20世紀の人類がそしてアロン自身が実際に経験したものは、科学的・産業的社会のもつ残虐性であったからだ。そこで、人々は科学や産業の発展とは関係なく、あるいはその発展を自己に従わせるかたちで普遍的な政治の原理が貫徹しているのではないか、とアロンは疑問を呈する。

第3の学派は、マルクス主義学派である。アロンはマルクス主義学派に対しても批判的である。マルクスはコントと違い、近代社会を資本主義社会として位置付けた。アロンによれば、19世紀初期の思想家の政治や国家を経済・社会現象に対する二次的現象とみなす傾向を、マルクスも共有していたという。³¹アロンは、政治的諸抗争を経済・社会の下部構造における矛盾によって説明しようとするマルクスの立場を拒否する。アロンにとって、政治的決定は、「だれがその国家を奪取するかにかかっているのである」。³²社会的矛盾に対する政治的秩序の自律性を最も決定的にした例として、1917年のロシア革命を挙げる。つまり、「暴力的に国家を掌握することによって、ひとつのグループの人間がロシア社会の全構造を変えることができたのである」とアロンは考える。³³

以上のことから明らかなように、政治はそれ自身の独立した法則をもち、政治的変化の主

28 同上、88頁。

29 同上、335頁。

30 同上、85頁。

31 同上、159頁。

32 同上、334頁。

33 同上、334頁。

体もしくは契機は権力を持った個人や集団に帰せられるのであり、政治に関する限り進歩という考えはふさわしくないとアロンは考える。それでは、人間は対立や紛争から永遠に解放されないのだろうか。アロンは紛争や闘争をなくすことは不可能だと考えるが、次善の方法があると考えている。

第2の政治哲学がここにある。紛争や対立を中庸化（緩和）することが可能だとアロンは考える。すでに述べたように、アロンは、モンテスキューにしたがい、戦争状態の原因を社会の中に求めた。アロンによれば、モンテスキューが社会の誕生とともに戦争状態が始まるといったのは、専制政治を権力の均衡によって限定し、戦争を中庸化によって限定するよう忠告するためであったという。³⁴

ホッブスは、自然状態の説明の中で自己の欲望のままにまかされた人間は、他の人間と直ちに敵対すると述べている。³⁵そして、「その論理的帰結として、ホッブスは政治的絶対主義を、平和を維持し好戦的な人間に安全を保障することができる唯一の政体として正当化することになった」。³⁶これに対してアロンは、モンテスキューからホッブスとは違った結論を引き出す。すなわち、戦争や不平等が、「社会の本質に根差すものならば、集団生活につきものの戦争や不平等を撤廃ではなく緩和し中和することが、政治の目的であるという結論になる」。³⁷

つぎに、第3の政治哲学は、紛争的政治秩序は社会の本質に根差すがゆえに、その社会の特徴によって性格が異なる、というものである。アロンが紛争の原因を社会に求めるもうひとつの理由がここにある。ここでの社会とは、人間が孤立をやめ互いに関係を結ぶ状態と考えられる。アロンはこの社会を自然状態（l'état de nature）と市民社会（l'état civil）のふたつに類型化して、そこにおける政治秩序の特徴を明らかにする。

アロンは自然という概念が曖昧だとしながらも、自然状態を市民社会との対比で次のように定義する。すなわち、「市民社会との対比では、自然状態は、最高の権威と判決を下す裁判所とその判決を執行する権限を与えられた警察官の存在とを排除する。だから、各人は自己の安全保障に責任をもち、武器を手にする決定を含めて自己の決定については自由である」³⁸。他方、市民社会とは、「法が支配し、裁判所によって正義が表現され、警察が暴力を抑止する」

34 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 339.

35 ホッブス「リヴァイアサン」第1部13章参照。

36 アロン、前掲『社会学的思考の流れⅠ』72頁。

37 同上、72頁。

38 Raymond Aron, "Anarchical Order of Power", *DAEDALUS* (Spring, 1966) 482.

社会である³⁹。換言すれば、アロンにとっての市民社会とは、合法的暴力を独占する実体としての国家に属する社会、すなわち「国内社会」である。そして、自然状態とは、その合法的暴力を独占する実体がない社会であり、アロンは実際には国際関係を想定している。

第3章 自然状態としての国際関係

本章では、アロンの国際関係についての基本的概念構成を検討する。アロンは前章で確認した政治哲学を基礎にして、国際関係を戦争の危険が特徴である「自然状態」として定義する。この定義で重要なのは社会と紛争は不可分な関係にあり、政治は経済社会からは独立した法則性をもち、さらに政治主体は権力を保持する個人か少数者である、という前述の第1政治哲学と、政治秩序を自然状態と市民社会とに二分するという第3政治哲学である。

3-1、政治秩序の二元論

アロンは、国際関係論がその対象を決定するふたつの方法を説明する。ひとつは、政治秩序の二分法である。アロンはそれを次のように説明する。すなわち、その二分法は、「国際関係の領域と他の社会的領域を区別するもの、すなわち、政治的に組織された共同体間の関係と、その他の全ての社会関係とを区別する要因を把握しようとする方法」である。もうひとつは、「国際関係以外の分野にも適用することができる概念をもって始める」方法である。⁴⁰ 後者の方法をとるモーゲンソーは、「国際政治は他のあらゆる政治と同様に、パワーを求めての闘争である。国際政治の究極目的が何であれ、パワーは常に直接目的である」と考える。⁴¹ だから、モーゲンソーは国際関係と国内政治には本質的相違を認めず、両者の違いは程度の差であるという。⁴² このモーゲンソーの方法に対して、アロンはそもそもパワーとかナショナル・インタレストなどの単一概念で、国際関係の一般理論を構築することは不可能である、と主張すると同時に、国内政治と国際関係に本質的な相違がないとするなら、なぜ国際関係

39 Ibid., 483.

40 Raymond Aron, "Qu'est-ce qu'une théorie des relations internationales ?" in *Etudes politiques*, *ibid.*, p. 362. R. アロン (岡本順一訳)『国際関係の理論と現実』法律文化社、1971年、9～10頁。

41 Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations* (Fifth edition), New York: Alfred A. Knopf, 1973, p. 29.

42 Ibid., p. 42.

には戦争があるのかと問う。⁴³

そして、アロンは、前者の二分法による研究領域決定の方法をとる。その方法は、市民社会での政治の在り方を基準に、それとの対比で国際関係を定義するやり方である。この国際関係の概念構成を市民社会（国内社会）との対比によって定義する方法は、古典派の国際関係論を特徴づける。⁴⁴では、アロンはそれぞれのふたつの社会をどのように定義しているのだろうか。

3-2、市民社会

すでにみたように、アロンは市民社会と自然状態の政治秩序を区別する契機を、「合法的暴力を独占する実体」の有無に求め、⁴⁵合法的暴力を独占する実体が存在する社会を、市民社会と呼ぶ。これは国家に統合された社会すなわち国内社会であり、ここでの政治秩序は、命令と服従を特徴とする。アロンによれば、国内社会では、全ての人間行動や集合体は、命令秩序（un ordre de commandement）という政治的側面を持つ。そして、「最高の政治」体（unités <par excellence politiques>）は、この命令秩序の頂点に立ち、合法的暴力を独占し、その他の集合体の政治的側面を決定する。国内社会には、法的命令秩序が存在し、その法的に正当な、すなわち合法的な暴力を独占する実体が命令秩序を実効力あるものになっている。そして、政治家（homme d'état）が法的命令秩序の頂点に在るのに対して、国民は法もしくは政治家の命令に対して服従する。したがって、国内社会の政治秩序は、純粋な友・敵の対立を含まず、法や慣習そして信条によって正当化された命令秩序である、とアロンは考える。⁴⁶

この市民社会（国内社会）の政治秩序の特徴を、アロンは権力を表わすフランス語のふたつの用語を区別することによって説明する。すなわち、アロンは、ドイツ語のMachtと英語

43 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 584.

44 この方法を、ワイトは次のように説明する。すなわち、「国家が政治社会の最終的単位であるというドクトリンは、諸国家によって構成される、国家を越えたより広範囲な社会はないというドクトリンを必要とする」。M. Wight, "Western Values in International Relations" in Butterfield, H. and Wight, M. eds., *Diplomatic Investigations*, London: George Allen and Unwin, 1966, p. 92.

45 アロンは、国家の合法的暴力の独占による定義をウェーバーに負っている。アロンによれば、この定義を発展させれば、1) 諸国家間の暴力も辞さない敵対と、2) 一国内での諸個人間及び諸階級間の法律に服する競争とは性格が違ふということは、承認せざるを得ないはずなのに、ウェーバーは必ずしも両者の相違を明確に区別していなかったという。R. アロン（服部平治他訳）『ウェーバーと権力政治』『ウェーバーと現代社会学上』木鐸社、1976年、178頁。

46 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 295.

のPowerによって表現される権力概念を、フランス語でのPouvoirとPuissanceとに分けて考える。アロンによれば、Puissanceが含む権力概念は、諸個人間の関係を示す関係概念と潜在力または能力 (Potentiel, Capacité) のことである。⁴⁷すなわち、「政治的概念に関する限り Puissanceは人間間の関係を示す。しかし、同時にそれは行為ではなく潜在力を表わす。したがって、Puissanceはひとりの人間もしくはひとつの集団が他の人間や集団を、自己の意志に一致させる関係を確立するためにもつ潜在力として定義できる (原文イタリック)」。⁴⁸

これに対して、Pouvoirは国家内の命令秩序を前提とした権力概念だという。アロンによれば、「Pouvoirは国家の支配的少数者のことである。・・・また、Pouvoirは国家の人格的具象化であるということもできよう」。⁴⁹銃や爆弾はそれ自体としては、完全に人間を殺すこともできるし、脅すことによって自己の意志に従わせることができる。しかし、銃や爆弾をもっているだけでは、国家や命令権とは直接関係ない。逆に、Pouvoirをもった個人が人を殺そうと思えば、自らは銃も爆弾も必要ないのである。

3-3、自然状態としての国際関係

アロンの自然状態の概念は、市民社会概念との対比で語られ、かれが国際関係を理論化する際の前提命題となる。アロンにとって、自然状態とは、その合法的暴力を独占する実体がない状態すなわち無政府状態のみでなく、戦争状態としてのホッブスの自然状態という意味を含む。アロンは自然状態命題から諸概念を演繹的に決定する。

アロンによれば、政治社会の最終単位としての市民社会は、国際関係においては主権をもつ最高の政治体として位置付けられ、その論理的帰結として、国際関係は無政府的状态である。これをアロンは、「非社会的社会 (a-social society)」とか、「無政府的秩序 (an-archical order)」と呼ぶ。また、「人間は独立を主張する諸政治体に属している。それゆえ、プエプロ族社会やフランス社会、あるいは合衆国やソ連の社会に類似するような『地球社会』だとか『人類社会』だとかいったものは、存在しない」という。⁵⁰前述のように、アロンがこのよう

47 この場合の潜在力と能力とは、同一概念としてアロンは使用していると思われる。権力概念の説明の中でアロンは、Paix et Guerre, (pp. 58-62) ではCapacitéを、“Macht, Power, Puissance” ではPotentielを用いている。

48 Raymond Aron, “Macht, Power, Puissance”, p. 176.

49 Ibid., p. 174.

50 Raymond Aron, “The Anarchical Order of Power”, p. 479.

にいう場合の「社会」とは、「国内社会」のような合法的暴力を独占した実体と法的命令秩序が必要であった。

つぎに国家主権が、国際的無政府状態と論理的にコインの表裏をなす。アロンによれば、諸国家は歴史上いまだかつて、*arche*（支配者）に服従したことはないが、このことは直ちに主権という国家の構成原理を説明するという。⁵¹すなわち、国家は対外的にいかなる権威にも服することがないという意味で、「独立」と「主権」を中心的構成原理としてもつ。諸国家は、対内的にはそれぞれ合法的暴力を独占し市民社会を形成し、自己自身の法を作る。この行為に対して、対外的に何ら拘束を受けない。つまり、いかなる上位の法にも法廷にも服することではなく、自己に関する決定を自らが下すのである。⁵²

国際的無政府状態と国家主権によって説明される国際関係が、直ちに戦争状態としてのホブズの自然状態を生ずる、という論理的な必然性はない。なぜなら、ロック的自然状態も論理的には想定されうるからである。⁵³しかし、アロンはホブズの自然状態を当然の前提として措提する。「平和ドクトリンは、まず第1に目的と行為主体に固執すべきではなく、ホブズの状態という理由にこだわるべきだ。すなわち、諸国家は、自ら決定する（復讐する）という、それゆえ武力に訴えるという最後の手段を保有する権利を要求する」。⁵⁴これはいくつかの平和理論について論じたなかで書かれた文章である。そこで、戦争は国家が国際関係においてもつ目的が何であろうと、そして、国家がいかに「平和的」で戦争を望まなくとも、永久平和など不可能であると主張する。なぜなら、「軍事的主権国家が多数存在するということは、武力衝突の可能性、そしてそれゆえ、権力政治と戦争を意味する」からである。⁵⁵

したがって、「政治は、それが諸国家間関係に関する限り、他国が存在することから生じる潜在的な脅威に向かい合う国家の生き残りという、観念的であると同時に客観的な意味を持

51 *Ibid.*, p. 483. アロンは、国際関係のアクターとしての国家を語る際に、「政治体、*unité politique*」という用語を用いる。アロンにとって国際関係では国家は主権に主体としての意味しか持たない。アロンによれば、「国際関係とは諸政治体間の関係である」とりあえず言っておこう。この政治体という概念は、ギリシャの都市国家、ローマやエジプトの帝国、さらにはヨーロッパの君主国、ブルジョア共和国、あるいは人民民主共和国などを包括する」という。Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 17.

52 アロン、前掲「マックス・ウェーバーと権力政治」、171頁。

53 ロック的自然状態とは、ホブズの自然状態と同様に、国際的無政府状態という仮説をもつ。しかし、そこでは、諸国家は法を尊重し、互いに敵対ではなく協力するものとして考えられる。R. H. Cox, *Lock on War and Peace*, London: Oxford University Press, 1960を参照。また、ブルは、戦争状態としての自然状態ではなく、「政府なき社会（a society without a government）」としてイメージする。H. Bull, "The Grotian Conception of International Relations" in *Diplomatic Investigations*, pp. 51-88, "Society and Anarchy in International Relations" in *Diplomatic Investigations*, pp. 35-50.

54 *Ibid.*, p. 684.

つようである」⁵⁶とアロンは考える。ここに、自然状態としての国際関係が、他の社会関係とは区別される原理的特徴がある。すなわち、「国家間関係は、戦争の陰で展開される。あるいは、より厳密な表現を使えば、国家間の関係は本質的に、戦争と平和の二者択一を含む」⁵⁷のである。

さらに、アロンは国家間の敵対を説明するために、「自己の意志の他者への押し付け」というクラウゼヴィッツの概念を用いている。すなわち、「政治体は、互いに自己の意志を他者に課そうと努力する。この仮説は、クラウゼヴィッツから借用した戦争の定義の出発点になるばかりか、国際関係の概念にも基礎を与える」⁵⁸と考える。このように考えるなら、各国家は、何ら上位の権威による拘束を受けることなく、自己の意志を他者に押し付けようとするので、国際関係を意志のぶつかり合いとして定義できる。また、「戦争は一種の強力行為であり、その目的は相手に自己の意志を課すことである」というクラウゼヴィッツの命題が、国際関係論の出発点を与えてくれるものとして、『平和と戦争』の第一部第一章の冒頭に引用している。

この考え方は、国際関係の権力概念に反映される。国家は国際関係においては、*Puissance*の主体であって*Pouvoir*の主体ではない。さらに、より究極的には、大使と兵士に国家の行為者を代表させる。この「ふたりの人間、このふたりのだけが、かれらが属する集合体の何らかの構成員としてではなく、代表者として行動する。大使はその職務に当たっては政治体そのものである。兵士は戦場において政治体である。かれは政治体の名において死体を同胞にささげる」。⁵⁹しかし、このふたりは、国内においては*Pouvoir*を握るひとりもしくは少数の人間の命令に服さざるを得ないから、究極的には、国内での*Pouvoir*を掌握する人物もしくは集団が、国際関係における*Puissance*の主体であるといえる。

アロンは ホブズ状況から出発しクラウゼヴィッツに至り、戦争と政治の関係をひっく

55 *Ibid.* この考え方は、戦争の原因を国際関係それ自身に求めたウォルツの第3イメージに相当する。つまり、戦争が発生するのは、人間が邪悪であるからでなく、また国家行動が攻撃的であるからでなく、国際関係が本質的に無政府的であるからである、という考えである。また、ルソーが「戦争状態」もしくは戦争について語っている諸論文の考え方と等しい。ルソーは、ちょうどこれは自分のものだと囲い込むのと同じように、ひとつの国が誕生すれば、連鎖的に他の国が誕生すると考えた。そして、そこではたとえ大部分の国が平和を望んだとしても、一部の有力国が問題を起こせば、平和は不可能だと述べている。
Kenneth N. Waltz, *Man, the State and War*, New York: Columbia University Press, 1954, pp. 159-238, J. J. Rousseau, "Que l'État de Guerre Naît de l'État Social", "Autres Fragments sur la Guerre" (小谷秀二訳『ルソー全集第4巻』白水社。ルソーの国際関係思想については、S. Hoffmann, *The State of War*, New York: Praeger, 1965, pp. 54-58. F. H. Hinsley, *Power and the pursuit of Peace*, London: 1963, pp. 46-61.

56 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 19.

57 *Ibid.*, p. 18.

58 *Ibid.*, p. 81.

59 *Ibid.*, p. 17.

り返して、国際関係における政治を戦争に従属させた。しかし、グリュクスマンや宮田等が主張するように、クラウゼヴィッツが語ったものは、戦争は政治に従属すべきだ、というものであって、政治や国際関係そのものに関しては語ってはいない。ましてや、「政治は、他の手段による戦争の延長である」とは一言も語ってはいない。「戦略的分析を特徴づける特殊な観点が、国際関係のすべての領域を規定するのだということや、世界についての戦略的イメージを押し付けることを妨げないらしい」のであれば、それは、まさにクラウゼヴィッツに国際関係を語らせたことに原因があるだろう。⁶⁰「けだし、ホッブス状況を前提とするアロンにとって、クラウゼヴィッツの戦争と政治の定理を倒錯させることの矛盾はなかったともいえる。

第4章 国際システム

本章において、アロンが自然状態として特徴づけた国際関係を、国際システムとしていかに概念化したかを明らかにする。アロンが国際関係は自然状態だという場合、それは戦争の危険をはらむ無政府的な分権秩序であり、国家間の勢力均衡の原理によって構成される秩序のことである。この自然状態から一定の秩序への移行というアロンの論理展開には、自然状態的性格を否定することはできないが紛争や対立の中庸化することは可能である、という第2章で触れたアロンの第2の政治哲学が反映している。

4-1、外交戦略システム

アロンはクラウゼヴィッツの戦争論を敷えんすることによって、国際関係を政治によって統制された外交と戦略のアルタナティブとして描く。すなわち、クラウゼヴィッツは、戦争それ自体は、極限状態に至る傾向をもつと考える。敵対する国家は、互いに自己の法を相手に押し付けようとし、その相互作用の結果、対立は極限状態に至る。しかし、人格化された国家の知性としての政治が戦争を統制する。アロンは、このクラウゼヴィッツの戦争時の

60 クラウゼッツ（篠田英雄訳）『戦争論 上・中・下』岩波書店、1968年。Andre Gluksmann, *Le Discours de la Guerre*, Paris: Bernard Grasset, 1979. 宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、1978年、200～251頁。P. R. Moody, Jr., "Clausewitz and the Fading Dialectic of War", *World Politics*, Vol. XXXI, April, No. 3, 1979, pp. 417-433. また、批判的立場から、クラウゼッツは国際関係について語っていると理解する研究者として、A. Rapoport, "Editor's Introduction" in A. Rapoport ed., *Clausewitz on War*, London: Penguin Books, 1968, pp. 9-80.

戦争と政治の関係を語る部分を、国際関係は戦争状態だとする前提によって、国際関係にあつては政治は他の手段による戦争の延長だと、戦争と政治の関係を逆転させている。

したがって、アロンによれば、政治家は平時にあつては、非軍事的手段によって他国と交渉する。これが外交である。また、戦争時には、外交が停止されることはないが、全面的な軍事活動を展開する。これが戦略(戦争)である。⁶¹この外交と戦略は、ともに国際関係の自然状態から生じる権力政治にしたがう。ここでの「平和とは、政治体間の対立の暴力的形態の多かれ少なかれ持続性のある中断として現われる(傍点は原文イタリック)」。⁶²この平和時の国際関係は、過去の戦争の陰で、あるいは将来の戦争の恐怖もしくは希望のなかで展開する。⁶³この平和(外交)と戦争(戦略)が不可分であるとするアロンは、外交戦略システムとして国際システムを定義する。すなわち、「私は国際システムを互いに一定の関係を保ち、単一の全体戦争に巻き込まれやすい政治体によって構成される全体、と呼ぶ。国際システムへの完全な参加権利を有するメンバーは、主要な国家の責任者が力(force)の計算をおこなう際に考慮する単位(unités)である(傍点は原文イタリック)」。⁶⁴ここからいえることは、アロンにとって、国際システムとは、諸国家間の外交戦略システムで、単一の全体戦争(世界戦争)の可能性が危険を含む国家間の権力闘争の全体のことである。そこには、大国中心の階層構造がある。

アロンは、この国家間システムとして定義された国際システムを、行為主体(国家)の力(force)とイデオロギー的側面に注目することによって、国際システムのふたつの特徴を考える。第1の特徴は、力関係の構成(configuration du rapport des forces)である。アロンはこれを国際システムの主たる特徴だと考える。第2の特徴は、国家の観念(idée)と感情(sentiment)が、国家行動に影響を与えることによって、システムの性格が異なる点にあるという。⁶⁵

アロンはそれぞれの特徴から、全部で4つの国際システムの類型を導き出している。第1の特徴である力関係の構成にはふたつの類型がある。いずれも勢力均衡システムで、外交戦略が多数の国家間での勢力均衡として展開される「多極構成」と、ふたつの同盟との間で均衡が可能な「二極構成」の二類型がある。⁶⁶つぎに、第2の特徴からアロンは、同質システムと

61 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 36.

62 *Ibid.*, p. 158.

63 *Ibid.*, p. 36.

64 *Ibid.*, p. 103.

65 *Ibid.*, p. 104.

66 勢力均衡に関しては以下がある。E. B. Haas, "The Balance of Power: Perscription, Concept or Propaganda", *World Politics*, Vol. V, No. 4, (July 1953) 442-477, M. Wight, "The Balance of Power", in H. Butterfield & M. Wight eds., *op. cit.*, pp. 149-175, A. Wolfers, *Discord and Collaboration*, Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1962, pp. 117-131.

異質システムのふたつの類型を考える。それはつぎのように定義される。すなわち、「諸国家が同じタイプに属し、同じ政治の考え方に従うようなシステムを同質システムと呼ぶ。他方、諸国家が異なる原則に従って構成された矛盾する価値に依拠するようなシステムを異質システムと呼ぶ」。⁶⁷

同質システムにおいては、諸国家は闘いのあとは和解する可能性はある。しかし、異質システムでは妥協なき対立になり、そこでの戦争は、ゲームや儀式としての戦争ではなくなり、徹底的な闘いがおこなわれる。ナポレオン戦争や社会主義国家の出現が国際システムにもたらしたのは、まさにこの特徴だとアロンはいう。⁶⁸

4-2、脱国家社会と国際システム

アロンの国際システムの概念をより明確にしてくれるものとして、トランスナショナル社会（脱国家社会）との比較検討がある。アロンが強調する点は、今日、経済的・社会的領域では世界規模で統合が進んでいるが、そこにおける政治秩序は依然として無政府的・分権的国際システムのままである、ということである。

アロンによれば、国際関係は普通、非国家間関係を伴うという。そして、この関係は「社会」を構成する。しかし、この場合の社会とは、「市民社会」で定義された法的命令秩序を伴った政治社会のことではなく、非政治的な人間関係として考えられる。アロンは、古代ギリシャやヨーロッパの社会はトランスナショナル社会であったという。それは、国際社会でもなければ超国家（surpranational）社会でもない。⁶⁹国境を越えた通商や人々の移動が活発になり、共通の信条が共有され、国境を越えた組織が増えればトランスナショナル社会の統合性は高まる。

20世紀の現代、科学技術や経済の発展により、このトランスナショナル社会は格段の発展を遂げた。世界にはほとんど相違がなくなってしまったかのように、同じ様な空港があり、資本主義・帝国主義といった言葉が飛び交う。だから、旅行者はあたかも人類が単一の世界に住んでいるかのような印象を受けてしまう。「しかし」、とアロンはいう。この印象は人々

67 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 108.

68 イデオロギーの登場と「敵」概念の変化と関係については、C. シュミットが興味深い研究をおこなっている。C. シュミット（田中浩・原田武雄訳）『政治的なものの概念』未来社、1970年、および G. シュワープ（服部平治他訳）『例外の挑戦』みすず書房、1980年を参照。

69 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 113.

を惑わす。経済的・社会的・文化的統合が進んだ人類は、過去と同様の国際システムによって分断されていることを忘れるべきではないという。⁷⁰つまり、「国際システムは、トランスナショナル社会の国家間的側面であり、人々はその社会に属しながら、別々の主権にしがっている(原文イタリック)」⁷¹のである。国際関係の自然状態的不完全さは、いくら諸国家間の商業取り引きが拡大しても修正されないし、通信や輸送手段が発達したり、また学者や知識人が会議で一緒になったとしても、国際関係は自然状態から脱することはできないという。⁷²

このように、国際システムは、トランスナショナル社会からは何ら影響を受けずに自律性をもつばかりか、逆にトランスナショナル社会の方は、国家間の法則に影響を受けることがある、とアロンは考える。すなわち、アロンによれば、スポーツ・科学・旅行・宗教・ビジネスなどの私的な個人的な国境を越えての関係は、国際システムのジャングルの法則から自由ではない。⁷³この最も顕著な例として、アロンは冷戦時代の東西対立を挙げる。すなわち、1946年以後、ヨーロッパのトランスナショナル社会は、国家間秩序の結果である鉄のカーテンにより分断されたという。鉄のカーテンにより東西の商業交流は減少し、さらに交流は個人間ではなく国家間に限定されてしまった。

アロンによれば、外交戦略システムである国際システムは、自然状態としての国際関係の秩序を示すものであり、トランスナショナル社会から自律しているどころか、むしろ、トランスナショナル社会に影響を与えることがあるのである。

むすび

本稿の目的は、認識論的な視点からアロンの国際関係論を検討することであった。その観点からアロンの国際関係をまとめるなら次のようになるだろう。すなわち、アロンは激動のヨーロッパを経験し、戦争の危険が本質的な国際関係の自然状態の特徴を理論の出発点にした。諸国家間において最も顕著に権力政治が現われ、諸国家は主権と独立の主体として、生き残りを目的に行動するという政治の法則は、経済社会的要因からの自律性とそれらに対する優位性を主張する。その結果、国際関係は戦略外交システムとして概念化され、トランス

70 Raymond Aron, "The Dawn of Universal History" in *History and Politics*, pp. 228-229.

71 Raymond Aron, *Paix et Guerre*, p. 113.

72 Raymond Aron, "The Anarchical Order of Power", p. 479.

73 *Ibid.*

ナショナル社会への自律性と優位性を認める。アロンのこの理論的立場は、生涯において基本的には変わることがなかった。⁷⁴

このような概念構成をするアロンの理論構築の方法論的問題は、国際関係論の概念構築の前提として、「国内アナロジー」を用いたことであろう。アロンは国内政治秩序を国家権力を背景にした法的命令秩序として定義し、その対比で国際関係を自然状態であるとしたうえで、諸概念をそこから構築する。この方法は、「自然状態還元論」といってもよい。しかし、この方法による国際関係の定義は、世界という場の複雑な政治状況の正しい理解を困難にしている。なぜなら、国際秩序は、無政府的でありながら単なる戦略外交システムに還元しきれない、一定の構造化された政治秩序が存在するというユニークな政治状況を含んでいると思われるからである。

74 Raymond Aron, *Les Dernières Années du Siècle*, Commentaire Julliard, 1984 (柏岡富英他訳『世界末の国際関係論 アロン最後のメッセージ』昭和堂、1986年)を参照。